巻頭インタビュー

農村風景をつくる 都市と農村の関係を考える

東京工業大学教授・石積み学校代表理事　真田 純子さん

景観工学を専門とする真田純子さんは、日本各地で行う石積みワークショップにも尽力されています。昨年出版された『風景をつくるごはん』には、都市と農村が良好な関係であるためにお互いの価値観を見直し、「社会のシステム」を変えていくことが重要だと書かれています。それはまちづくりや民家の活用にも大きく関わることだと思います。これまでの取り組みや、都市と農村の関係についてお話を伺いました。

土木事業でインフラをつくるときに地形を壊すことがありますが、私が専門とする景観工学は、それをどのように良くしていくか考えていくことから始まりました。工学だけではなく人が風景を見ていいと思うことがどういうメカニズムによるのかも分析します。インフラに関わるので都市の街並みや道路、河川を対象にすることが多いですね。

私は2007年に徳島大学に勤務することになり、農村のことも考えないといけないと思うようになりました。インフラをつくることをベースにした意識でいると、なかなか農村の風景は理解できません。都会で生活している頃は、人が田畑を耕していれば農村らしい、いい風景だと思っていました。しかし、徳島の中山間地域を一望できる場所に連れて行ってもらったときに、ビニールハウスなどの施設が点在していて、「あまり美しくないな」と感じてしまったのです。生業の風景だから肯定したい気持ちもあるけれど、と。以後、農村風景をどう考えるのかが、研究テーマの1つになりました。

真田 純子　さなだ じゅんこ
1974年広島県生まれ。
東京工業大学環境・社会理工学院教授。
2005年東京工業大学博士課程修了、博士（工学）取得。
徳島大学助教、東京工業大学准教授を経て、2023年3月より現職。
石積み技術をもつ人・習いたい人・直してほしい田畑をもつ人のマッチングを目指して2013年に「石積み学校」を立ちあげ、2020年に一般社団法人化。同法人代表理事。専門は景観工学、緑地計画史。
著書に『都市の緑はどうあるべきか』（2007年）、『図解 誰でもできる石積み入門』（2018年）、『風景をつくるごはん』（2023年）。

徳島の中山間地で見た風景

石積みから始まる

徳島で車の免許をとったので、車でしか行けないところに行こうと思い、蕎麦の種まきイベントに参加した場所が石積みの里でした。周囲の段々畑に石積みが広がっているのを見て素晴らしいと思いましたが、道が斜面になっているので畑に行くまでに息があがるし、小型の耕運機を真っ直ぐ動かそうと思っても谷の方に落ちていき、全身筋肉痛になりました。田畑を維持することはどれだけ大変なことか、段々畑のあるような中山間地で生きていくことがまったく想像できていなかったことに気づきました。

こういうことを知らずに景観計画をつくりましょうと言うのは無責任だと思い、学生と一緒に茅刈りをしたり、2009年からは石積みの師匠に教わりながら学生や知り合いの社会人向けに石積み体験合宿を始めました。そうこうしているうちに、農村地域でも石積みの技術が伝わっていないことも分かってきました。そこで広く伝えていかなくてはいけないと、2013年から一般の人向けに「石積み学校*」を始めました。

場所を限定した「活動」ではなく、直してほしい人と習いたい人と教える人をマッチングする「仕組み」を作りました。はじめは徳島での開催が多かったですが、今は全国で開催しています。SNSで告知すると全国から参加者が集まります。JMRAでも民家を好きな人が集まるように、農村風景や石積みに興味がある人、自分の家の石積みを直したい人や空石積

＊石積み学校：中山間地の棚田や段畑につくられてきた、コンクリートを用いない空石積みの技術を有する人が少なくなってきているため、石積みの風景とそれを支える技術の継承を目的として活動をしている。